大正十二年三月三日　於市會議事堂

市立名古屋圖書館第一回講演集　其二

都市と圖書館

大阪府立圖書館長文學士　今井貫一氏

始

278-81

都市と圖書館

今井貫一氏
大阪府立圖書館長文學士

私は大阪の府立圖書館の今井貫一であります。此度名古屋市に名古屋圖書館が出來ましたに就ては、講演會を開くことになりまして、その講演會に私が出まして、お話をすると云ふことは、誠に汗顔の至りであります。

私の演題は都市と圖書館と云ふのであります。私が大阪の圖書館に居りまする關係から、都市と圖書館と云ふことに就て色々取調べましたる處を、茲に申し述べまして皆樣の御批評を仰ぐ次第であります。

元來、都市と農村とは、其社會狀態が全く異つて居りますので、是れに對する社會政策上の諸問題も、それ〳〵特殊のもので無ければなりません。從つて其社會諸施設も、それ〳〵異つた種類を持たねばならぬ筈なのであります。

茲に只今私が考究せんとする圖書館に就ても、都市や農村が、圖書館に對する利用

大正
13.2.15
内交

の弱強、必要の程度、又は其設備の大小から、圖書館の種類等に就て、兩者が各々異つて居らねばならぬ事は當然のことでありますのに、現今我國におきましては、必しも左樣ではありませぬ。我國に於ける圖書館の實際を見ましても、又社會の圖書館に對する要求を見ましても、都市と農村との區別を全く無視して居りまして、何の考へもなく唯漫然と圖書館と云ふものが凡ての社會團體に必要であると云ふだけの考で、其の設置に就ても、都市農村兩者の間に、その緩急、大小の差別を全然見て居りませぬやうであります。

現に小さな村に相當な圖書館がありまして、反つて大都市に其設けがないやうな奇妙な現象も見ねるのであります、之は要するに兩者の間の社會狀態に就て考へないからだらうと思ひます。元來凡ての社會施設は、社會狀態の如何により、必要があつて要求が起り、要求があつて其事が企てられるものであります。各時代に於ける各種の社會的施設の興廢、變遷も、社會の進化、生活の狀態の變轉に依る自然の結果であります。現今中等學校の增設や、其他新しく興る諸施設の如きは、皆此法則に依つて起

大五

るのであります。此法則から考へれば、現代に於ては、都市は農村よりも圖書館に對して大に必要がある筈で御座いますから、其要求に依つて先づ盛に都市に圖書館の實施がなければなりません。農村には圖書館がいらないと云ふのではありません。農村にも圖書館は必要であります。併し實施の順序から申しますれば、都市は農村よりも先に圖書館を設くべきもので、又同じ理由で大都市は小都市よりも必要の程度が高いから、先づ大都市が最先に圖書館を有し、それから小都市、それから農村に及んで行くべきもので、又圖書館の大小の差も同じ順序に依るべきものであります。

米國或は英佛獨等、歐米各國に於ては、此原則通りその順序がよく立つて居ります。つまり社會政策の必要に應じて設けられてゐるのであります。所が我國に於ては左樣でない。勿論吾々は圖書館施設に關する理想の希望としては全國至る所に普及せらるゝことを要求するもので、此理想論から申しますれば、都市の間に差別はないのであります。然し施設と云ふものが、必要、要求の實現であると云ふ點から考へれば、圖書館の性質上國民教育のやうに凡ての社會團體に均等に必要であるとは云へません。

歐米のやうに都鄙に依つて圖書館施設に差別があるのは寧ろ當然のことであります。物の緩急を考へることも必要であつて、實際小農村などに圖書館がなくても左程不思議には思ひませんが、之に反して都會にないと云ふことは、確かに社會施設上の缺陷を感ずるのであります。

この名古屋は日本六大都市の一つでありまして、人口四十萬以上ありながら、横濱市と同樣、他の四大都市に後れ、久しく公立圖書館がなかつたので、實は吾々圖書館員の側から、之を名古屋市に於ける社會施設の缺陷と見て居たのであります。尤も大分以前から圖書館の必要を認められ、その計畫があつたことは承つて居りまして、又それが今回愈實施されて、最近に一大公立圖書館の開館を見ることになりましたのですから、名古屋市の社會施設に就ては、吾々の側からは最早や評論する必要はなくなつたのであります。そして社會施設の法則が實行されたものと見て誠に喜びに堪へぬ次第であります。

然しながら前にも申したやうに我國一般に於ては、今日尙都市と圖書館との關係が明確に認められて居らぬやうに思はれます。既に圖書館を有する都市でさへ、之を社會生活上の必然の要素として尊重してゐないやうに思はれます。それで今回この名古屋市の市立圖書館の設置されました機會に、都市圖書館に就て今まで研究いたしました結果を是から簡單にお話しやうと存じます。そして賢明なる諸君の御考慮を仰ぎ、當市の圖書館が、市民諸君の十分なる諒解の下に存在の意義を明かにし、將來この事業が益々隆盛に趣き、市民の社會生活上に多大の貢獻をなすやうになりますことを願ふ次第であります。

偖、都市の圖書館と申せば、之に對して農村の圖書館がある譯であります。都市圖書館の研究は之を農村に比較對照して、其特徴を擧げ、相違の點を申述べなければなりません。併しながら都市と農村とは人口の多少、密度、經濟生活の狀態は素より、人情習慣に至るまで社會生活狀態に於て異つて居ります。從つて圖書館の施設がその相異に基いて差異のあるのは當然の事でありますから、其特徴を一々論究する必要はないと思ひます。又現代の都市に於ける圖書館の必要は、寧ろ比較的でなく、絶對的

のものと考へられますから、私が茲に都市と圖書館との關係を考へて見たいと思ふのは、そのやうな比較論でなく、即ち農村に於ける圖書館の必要、又は性質如何と云ふことゝは全然無關係に、單に都市に於ける圖書館存在の意義に就て考究して見たいと思ふのであります。

そこで、私の意見を申述べます前に、話の順序として一應參考の爲めに二ッ三ッ歐米の大都市に於ける圖書館施設の實際はどうであるか、又之に對照して我國の都市の圖書館施設の狀況はどうであるか、と云ふことに就て其概況を御紹介して兩者を比較的に觀察して見やうと思ひます。先づ大體に就て申せば、圖書館事業全般が、歐米と日本とは非常な相違があります。其相違とは、申すまでもなく日本の圖書館事業が歐米のに比べて甚しく劣つてゐることであります。日本に於ては最近にこの事業が振興して、十數年前に全國に公私立の公開圖書館が僅かに三百位であつたのが、大正十年の調査に依ると、其數倍の千六百四十一館に增加して、大に盛況は呈してゐますが、之を歐米のに比較すると、殘念ながら殆んど較べものにならぬ位幼稚なものであります。又都市だけに就て見ますると、歐米では凡て都市と云はるゝ所には必ず圖書館がありますが、我國の現在では未だ其設のない所があります。單に圖書館の有無の點ばかりでなく、其施設上の意氣込に於ても、兩者には非常な差があります。

歐米の都市の中で其大なるものには、大規模の中心的圖書館がありまして、その外に幾多の大小各種の圖書館が必要に應じて設けられて、共に盛に利用されてゐます。所が日本に於ては東京を除いては、其他の都市では、例へ圖書館がある所でも、漸く一ッ位で、且つそれが必要の如何などを全く眼中に置かず、云はゞ、只申譯だけに設けてあると、思はれるやうな觀が少くありません。

例へば大阪市の如きは、人口百數十萬の大都市でありながら、一昨年までは僅に府立圖書館が一つあつたばかりで、夫も市の勢力に較べて規模は少さなもので、到底、市民の需要に應ずる程度のものではありませんでした。それで市民は久しい間不便を感じて、圖書館の利用難を訴へてゐましたが、其結果一昨年になつて、市立圖書館が四館開館せられ、又府立圖書館も閲覽席數に於て三倍に擴張し、今日では府立、市立

双方を合して、毎日三千數百人の閲覧者を收容することが出來るやうになつて、以前に比較すると六七倍の收容增加となつた譯でありますが、併しながら此增加は僅に利用難の一部分を緩和し得たに過ぎません。要求の滿足と云ふ所までには未だ餘程の距離があります。府立圖書館では閲覧人員を增加したと云ふだけで、日々多數の求覧者を拒絶してゐることは以前と少しも變らないのであります、依然として利用難があるのであります。斯樣な有樣でありますから市民は圖書館利用の必要を感じながら、此利用難設備の狹少に對し、批難攻擊の聲が高いやうな狀態であります。この批難の聲は吾々の耳には急鐘(はやがね)のやうに强く響きまして少しも、安靜を得ることが出來ませんのですが、之が何故他の人々には聞えないのであらうかと、私は不思議に堪へないのであります。

扨て斯樣な憂慮すべき狀態は、日本では他の都市に於ても同樣であらうと思ひます。斯の如き貧弱なものに較べると、歐米の都市に於ける圖書館經營の盛大なことは、殆んど比較にならぬものであります。滿員の爲めに入館拒絶とか、利用難などゝ云ふこ

とは歐米の圖書館界では全然見られない現象であります。

最も日本と歐米とは根本の市勢に於て優劣がありませうし、從つて社會の諸施設の多くが異つて居りまして、獨り圖書館事業だけが日本の都市が劣つてゐると云ふ譯ではありませんが、例へ市勢を標準とし、又他の諸施設の優劣を考へ合せても、私は圖書館事業に於ては特に兩者の懸隔が餘りに甚しいと信ずるのであります。

そこで、茲に二三の都市に於ける圖書館に就て具體的に、統計數字を擧げて其の經營を御紹介して御參考と致しませう。

紐育圖書館に於ては、一昨年度の同館年報によると藏書二百六十三萬百二十九冊、一ヶ年の增加十九萬七千五百三冊、逐次刊行物は世界各國のものを集めて其數參考部に千百七十九種、貸出部に四百五十三種四千三百八十五部、日本の新聞だけでも六十六種あります。この參考部と云ふのは、中央圖書館とも云はれるもので、學術研究の爲めに設けられてゐるものでありまして、貸出部と云ふのは、所謂通俗圖書館であります。

それから一ヶ年の閲覧人員は、參考部の入館者三萬八千百五十八人、通俗部の來館閲覧者六十四萬四千九百九人、一ヶ年有効の館外滞出閲覧券交付十四萬三千五十二人而して此等の閲覧人の閲讀せる圖書は、參考部に於て、算入せるもの二百六十八萬四千百九十三冊、之に算入外のものを加ふれば約五百萬冊にも達します。通俗部では一千二十二萬冊を館外に貸出して居ります。

又之等の大運用を爲すべき設備としては、建築費九百萬弗を費した本館を中心として、一館約八萬弗を費した分館五十餘ヶ所もありまして、其他圖書貸付取扱所等の便宜的施設を合せて、總計五百五ヶ所の閲覧機關が設備されてあります。

それから斯のやうな大事業の運用資金、即ち經常費を見ると歳入は一千四百七十萬四千弗の基金の利子と、市圖書館税收入及交付金百十七萬七千百七十弗を主とし、其他を合せて年總額が二百二十五萬四千百七十四弗、之を歳出に充てまして、俸給百五十六萬四千九百十九弗、圖書費二十三萬八千四百十五弗、其他館費四十五萬八百四十弗を費してゐます。それから館員は千二百三十六人を使用してゐますが、以上は唯數字のみを擧げたに過ぎません。

此數字を實現せる設備、運用の説明は略しますが、斯かる大數を見ても如何に其大仕掛であるかが驚かれるのであります。

それで一ヶ年の經費は四百五十萬圓餘を費すのでありまして、日本全國の圖書館を集めましてもこの紐育圖書館に及ばないのであります。如何に紐育が人口三百二十萬人富六十八億五千八百萬弗の大都市であるとは申せ、之を我國現都市の趨勢に對比して隨分思ひ切つた多額の費用を之に投じて居るかが分ります、然るに當事者は之を當然のこと、考へまして少しも不思議と思はぬばかりでなく、近年圖書其他の騰貴の爲め此巨額なる經費でも尚ほ旦不足を訴へてをるのであります。

現に一昨年の歳入歳出の對照を見ましても、二十五萬弗の歳入不足を生じて居り、從つて必要なる圖書も購入する事が出來兼ぬるといふ所から、圖書館理事會で是が不足額の補充を協議したが、是非適當なる方法も就かないので遂に理事中の數人か幾何かの寄附金を醵出し、之等の寄附金を集めまして漸く不足額の三分の二を補ふことが

出來たと云ふ事であります。然るに或婦人が此事を聞きまして一百萬弗を基金として寄附したと申すことであります。

日本には千數百の圖書館がありまするが此の不足額の三分の一の經費を投じてゐる圖書館が一つもないといふ現狀であります、其の餘りに懸隔の甚だしいのに一驚せざるを得ないのであります。如何程市勢に大小の變りがあるとは申せ、斯の如き甚だしい相違といふものは決してない筈であります。

之を見ましても如何に日本の圖書館が幼稚であるかといふ事が略ほ御諒解がつく事と存じます。要するに現在に於ける日本と歐米とは、圖書館といふものに對しまする感念に非常の差異があるのであります。

此の圖書館は紐育市本部のものでありまして、此の外に同じ紐育の内で川一つ隔てたブルックリンといふ所には又別個の一大圖書館かあるのであります。

ブルックリンの圖書館と申しまするのは、其本館は未完成でありまするが、分館三十四を認め閲覽機關三百九十三を有しまして、其藏書は九十五萬六千五十一冊あります。而して一ヶ年の圖書の增加は九萬七千七十二冊、又一ヶ年の館外閲覽劵交付人員は十二萬四千八百四十九人、館外貸出が六百七萬二千七百七冊でありまして、其の圖書館の經費は七十九萬九千四十五弗、館員四百人を有しまして、實に堂々たるものであります。

序に申し述べまするが、此の紐育とブルックリンの分館といふものは、大抵カーネギー翁の寄附にかゝるものでありまして、曾て一九〇一年にカーネギー翁は紐育とブルックリンの兩方へ分館一百館の寄附を申出でましたが、流石の大紐育市も當時夫程の必要はないといふので紐育に四十五館、ブルックリンに二十館の割當をしまして、合計六十五館之の費用五百二十萬弗の寄附を受けたのであります。

紐育の圖書館は都市の圖書館といたしましては世界最大のものでありまして、之は先づ別格といたしましても、其他歐米各都市に於きましては夫々市勢に順應した相當の圖書館を經營いたしてをります。

例へば、ボストン圖書館の如きは堂々たる本館の外に分館十七を有しまして、其藏

書は一百二十五萬八千二十一冊、館外閲覧劵交付人員は十萬五千四百五十八名、館外貸出は二百六十七萬二千六百四十六冊、此の經費八十九萬四千五百十二弗であります

準路易圖書館は市の人口七十七萬人でありまして、其藏書は六十三萬四千七百七十七冊、此の經費が六十六萬二千四百二十九弗で、館員は二百九十六人であります。

更に小なる都市でありまするテンバー圖書館でさへも、其藏書二十二萬九千二百十九冊、館外貸出一百十二萬一千七百十七冊でありまして、此の經費は十二萬九千二百七十九弗を費してをります。

次に英國を見まするにマンチエスター圖書館は、市の人口七十四萬四千ありまして二十五區に分割されてをります、各區毎に一分館を建て外に本館を持つてゐます、即ち二十六個の圖書館があるのであります。其藏書は五十四萬八千三百五十九冊、館外閲覧劵交付人員五萬一千三百五十一人、館外貸出は三百二十萬三千百二十四冊でありまして、人口一に付て三・六二冊の貸出に當るのであります。此の經費は七萬九千八百八十一磅を費してをります、以上は一九二一年度の報告に依て調べた所であります。

以上僅かに二三の例を申上げたのでありますが、其他の都市何れも市勢の大小に應じまして必要なる程度の圖書館を有してをるのであります、飜つて日本の各都市に就て見まするに、之を歐米に比しますると殆んど圖書館の有無が疑はる、程今日尚貧弱なる狀態にあるのであります。日本に於ける圖書館と前述の圖書館との比較談は止めまして、是から都市全體に就て概括的、統計的に觀察致しまして、彼我對照の資に供したいと思ふのであります。

さて日本全國(新領土を除き)の市及區といふものは只今九十程あるのでありますが此内市立の圖書館のあるものが三十四ありまして、其館數は九十八あります、(東京二十、大阪四、八幡三、其他各々一)府縣立のあるものが十九ありまして内府縣立と市立の兩方あるものが二(大阪、岡山)ありますから、結局公立圖書館を有する都市は五十一ある事になります。殘りの三十九の中私立のあるものが十八ありますから、結局殘りの二十一の都市といふものは公私立圖書館を全然有してをらない都市であります。

此の統計に就て見まするとと、九十都市の内には漸く市制が實施されてゐる樣な小都市もありまするので、其中の二十一都市位に圖書館がなくても、全體の上からはほゞ全國都市に圖書館が行き渉て居る樣に考へられまするが、然らば何れの市に如何なる圖書館があるかと問ひまするとと、之に對しては僅かに二十位しか擧げる事が出來ないのであります。

夫れも決して所在都市の市勢に適應した有力のものではないのでありまするから、決して全國に圖書館が行渉てゐるとも考へる事は出來ぬのであります。右九十都市の内大正九年十月一日調の人口表に依て區別的に圖書館の有無を調査いたしまするとと、人口百萬以上五十萬以上四十萬以上の都市が各々二つづゝありまして、此の六大都市には皆圖書館といふものがあるのであります。然し其次の二十萬以下十萬以上の都市は十ありまして、其の内には公立圖書館のあるものが六ありまして、他の四都市は全然ないのであります。五萬以上の都市は二十六ありまして、其の内公立圖書館のあるものが十五、私立圖書館のみあるものが五、全然ないものが六あります。

人口五萬以下の都市四十八の内公立圖書館を有するものが二十四、私立圖書館のみあるものが十三、全然圖書館のないものが十一あるのであります。

經費年額に就て申しまするとと、東京市は二十館を經營いたしまして、十五萬七千圓餘でありますのに我國唯一の國立圖書館たる帝國圖書館が、僅かに九萬圓足らずの貧弱なる經費で經營いたしてをるのを見るにつけ、何となく遺憾に堪へませぬ。私の勤めてをりまする大阪府立圖書館は、昨年迄五萬圓を以て經營いたしてをりましたが、此度擴張の結果八万八千圓餘に增額したのであります。

私立圖書館なる南葵文庫が四萬五千圓を費してをりまする、以上の數館を除きまして、一萬圓乃至三萬圓を費してをりますのが十二館、五千圓乃至一萬圓が十二館、三千圓乃至五千圓が六館、千圓乃至三千圓が二十六館、千圓以下が八館でありまして、中には一千圓位の市立圖書館もある位であります。又一千圓に滿たぬ私立圖書館もございます。

次に藏書に就て見まするとと、東京帝國大學附屬圖書館が七十万冊、京都帝國大學附

屬圖書館が最近五十萬冊に達したといふことでありますが、此の戰鬪艦級の圖書館も遺憾ながら共に公開でないのであります。

公開のものといたしましては、創立五十年を經ましたる唯一の國立圖書館である帝國圖書館が僅かに其數三十四萬八千五十二冊でありまして、之を英佛の國立圖書館に比較いたしますれば漸く其一割位に當るのでありまして、如何にもおはずかしい次第であります。之等を筆頭といたしまして、十萬冊以上が二館、五萬冊以上が七館、三萬冊以上が十二館、一萬冊以上が二十六館、五千冊以上が十一館、一千冊以上が九館一千冊以下が一館といふような有樣でありまして、帝國圖書館を除きましては、其藏書は紐育の一ヶ年の增加冊數だにも及ぶものが一館もないのといふ、慘めな狀態にあるのであります。

又中には如何に創立の日が淺いかは知りませぬが、或市立圖書館で三館の藏書が合計九百三十一冊といふ、一寸した私人の文庫にも劣つたものが現にあるのであります之などはまつたく滑稽であると私は斷言して憚らぬのであります。

現在日本都市の圖書館概況は、略右の通りでありまして一、言之を評して、殆んど沙汰の限りとでも申して置きませう。私は敢て之に對して只今細詳いたすことを避けまするが、只前述の外國の各圖書館と我國の圖書館とを比較して、切に賢明なる諸君の御考慮を希ふ次第であります。

茲に序に此機會に於きまして私見を附け加へたいと存じます、夫は或一部の人々又は圖書館に從事いたしてをりまする者の內に於きましても、圖書館といふものは小規模のもので足る、簡易なものでよい、さして多額なる經費を要せぬなどと主張する人々もございます、土地柄の如何をも辨へず何處でも圖書館といふものは、手輕なものでよいといひ、甚しきに至つては、圖書館は簡易なものに限るとさへ斷言いたして憚らない人々も屢々見ることがありますが、私は之を見當違も甚しい愚論と申して、敢て憚らないのであります。私は圖書館經營には必ず相當の經費を要しますることとし其設備も一時的のものでは用をなさないといふことを痛切に感じてをります、苟も必要を認めまして事業を起す以上は、當初より相當の負擔を覺悟してかゝらねばならな

いと私は主張いたすのであります。最も程度によりますることは勿論でありまするが何處如何なる時でも簡易圖書館を以て充分であると云ふような愚論は兒戯に類するものであると、敢て斷言するを憚らぬのであります。畢竟さような微温的な意見が患をいたしまして、時には間尺に合はぬものが出來上りまして、世人から其存在の意義を疑はれるようになるのであり、ひいては圖書館全體が前述の樣に不振な狀態に止まつてゐるような次第であります。當名古屋市に於かれましても將來圖書館の經營には必ず其市勢に順應するものとなし其價値を確實にならしむる爲めに十分なる負擔をあらかじめ御承知下さるよう特に此際市民諸君の御注意を希ふ次第であります。

以上略說いたしましたように、日本の都市では圖書館が未だ適當の程度に普及發達いたしませぬ、之に反し外國では前述のように完備してをるのであります。凡ての社會施設は必要があり、要求があつて、初めて必然的に起るものといたしますれば、歐米各都市では圖書館の存在に意義を有し之を肯定するに引き替へ、日本では却て之を否定いたしまするような、彼我さほどに社會狀態を異にしてをるのでありませうか。

先づ此問題を解決してかゝる必要があります。其解決には精神的、物質的の各方面から日本と歐米の都市生活を精細に考究いたしまして其結果に依つて初めて斷定するのでありませうが、私の管見では東西國情を異にいたしまして、從つて都市生活情態にも相違の點は多々ございませうけれども、現代的都市といたしまして、日本の都市が獨り圖書館のような文化的施設の必要を感せぬといふような、社會生活情態であるとは考へられぬのであります。申すまでもありませぬが、最近世界の都市は益々物質的にも精神的にも共通性を有するようになつたのであります。若し此の共通性に遠ざかるか又は之に逆行いたしますれば、其の都市は現代的文明都市としての生命價値を失墜せねばならないのであります。

若し日本の都市少なくとも大都市に於きまして、西洋の都市が圖書館經營を其の社會生活上の必要條件であり一つの要素であるといたしまして、其存在を認めてをりまするのに關はらず、有力なる圖書館を持たないといふことになりますると、其れは我國都市の發展上大に憂慮すべきことでもあり、引ては國運の消長にも係る重大事件で

あらうと考へるのであります。

都市と圖書館との關係の如きことは我國に於きましては未だ問題になつて居ないようでありますが、之は吾々圖書館員の經驗から考へまして、實に遺憾に堪へぬ所でありまして、大に識者の注意を促したいと存じます。

尤も都市の社會生活と圖書館の關係に就きましては、廣く教育上、經濟上、其他諸般の社會政策方面からして研究致しまして、初めて斷定せらるゝのでありまして、唯圖書館側の推論にのみ俟つべきものではありませぬが、左樣な廣汎な研究は他日に讓りまして、私は茲に圖書館員といたしましての考へを簡單に申述べてみたいと思ふのであります。

先づ一般社會生活と圖書館とは如何なる關係を有するか。此點に就きまして簡單に觀測いたして見ますると、抑も現代社會の發達は嚴密に申せば遠く上世に源を發したのでありますが、所謂現代的社會といたしまして發達の運動を起しましたのは、近く十八世紀の後半頃からであります、即ち當時勃興いたしました自由開放の新思想が

動機となりしまして、社會一般の革新的機運を與へまして、特に產業、學術、教育といふ社會生活の三要素は、其機運に乘じまして前古未曾有の活躍を始め、其情勢は激烈なる勢を以て十九世紀を經て、現世紀に入り一層の速度を加へまして、今尙侵々として進行力を維持しながら、現代の社會を出現したのであります。即ち產業方面ではアダム、スミス及其一派の自由放任主義の經濟學說が動機となりて、英國の產業革命となり、之が年を逐て世界に波及いたしまして、產業が一大勢を以て發達いたしました結果今日の世界的大經濟生活を見るに至つたのであります。

又十八世紀後半から一般學術、特に形而下學の進步發達といふものは最も著しくなりまして、學理の應用に依りますれば、何事でも出來ぬことはないと云ふ有樣で學術萬能を謳歌するに至つたのであります。

更に教育に於きましては、同時に忽然として其閉鎖主義の因襲を打破いたしまして先づ門戸を開放し、それが普及的となりまして、從來學校教育圈外と見做されてをりました農工商の實業教育が大に其必要を感せらるゝようになつたのであります。

此のように産業と學術とが並進しまして、異常の發達をして、一つの大なる渦卷を起しながら、社會を向上發達せしめたのであります。

現代の文明は、全く此三者の活躍に因りまして、釀成せられたものと申してもよい位でありまして、社會百般の事物は皆此刺戟、衝動を受けまして、改善に次ぐに改善を以てし、遂に極點に推進めまして、夫が又更に最近の歐州大戰に遭ひ、あらゆる方面に大改造を要求する時勢を馴致いたしたのであります。

其結果は、物質的文明が高潮に達しまして、經濟的諸問題が各方面に起り、又精神的文化方面に於きましても、新しき思想や文藝や哲學が生れまして、吾人の精神生活に大なる變動を與へまして、諸種の社會問題が發生するに至つたのであります。

以上の如きものが即ち大體から考へましての現代社會生活であります。而して今尚産業、學術、教育は共に時運に應じまして適當なる進歩發達をして止まぬのであります。

此處に産業と學術のことは暫く措きまして、教育に就て申述べてみようと思ひます。

教育は大分以前から既に現代的でない時代後れである、行詰つてをるといふ批難を受けて居たのであります。元來近代教育は其初め平等普及教育を實行いたしました時に於きましては、家々に不學の徒なからしむと云ふことが一大發見でありましたが、社會の進歩に伴ひまして、此の金科玉條も社會的價値を減じまして、一般教育の普及といふばかりでは不滿足を感ずるに至つたのであります。即ち教育の進歩が社會に後れたのであります、是に於て教育上の不備を補ひ之を現代的といたしまする爲に、教育の改善が盛に論究せられまして、所謂新教育論といふものが起たのであります。此の新教育に依りまして改善せらるゝと同時に、同じ意義に於きまして教育そのものを現代社會的とする爲に、一つの新案が亦發見せられたのであります、夫は即ち國民教育に繼續した補習教育特に實業補習教育であります。

此の如くにいたしまして、學校教育を實際的にならしめようと力めましたけれども夫れでも現代の社會生活は教育に對して滿足をしなかつたのであります。それ故遂に他の方面に向て教育力といふものを要求するようになりました、そして其擴張が即ち

所謂社會教育であります。

此の社會教育が重要なものとして取扱はるゝやうになりましてから、圖書館といふものが從來の性質機能を一變しまして、公共教育として重要視せらるると同時に、又缺くべからざる要素となつたのであります。

以上は、一般的の現代社會生活の情勢と教育の傾向並に之に關聯いたしました圖書館の社會的價値に就て概說いたしたのでありますが、私は此等の說明は最も能く中以上の都市に適用せらるべきものと考へてをります。何故にかゝる社會觀が都市に於て其色彩を濃厚にするかと云ふことは、茲に其說明を略しますが、結論といたしまして、以上の見地からいたしまして、私は都市と圖書館とは特に密接なる關係がありまして、都市の社會生活の進步を圖る上には、どうしても圖書館の利用を無視することは絕對に出來ないといふことを確信いたしてをります。

然るに日本の都市に於ける圖書館事業が前述のように貧弱であるといふのは、確かに教育的社會施設の缺陷であると思ひます。

こうした考へから、私は日本の各都市に於て一日も早く圖書館が眞に社會教育に缺くべからざるものであるといふ事を自覺して、相當なる施設を怠らない樣に希望して止まないのであります。

當名古屋市に於きましては、既に圖書館が設けられましたる以上は、希くは之を當市社會生活上最も重要なる施設の一として尊重し、宜しく範を歐米都市のそれに取り十分有力なるものとせられんことを希ひ、茲に卑見を申述べました次第であります。

（文責記者に在り）

大正十三年一月二十六日印刷
大正十三年一月二十六日發行

編輯兼發行者　樋口千代松　名古屋市中區御器所町字天神東九十一番ノ二

印刷者　棚橋桂二　名古屋市東區久屋町三丁目十六番地

發行所　市立名古屋圖書館　名古屋市鶴舞公園內

非賣品

終